

R 6 小学部研究のまとめ

1 目的

○児童にも、教師にも、
WIN! WIN! な教育活動を展開していこう！

WIN! WIN! な
教育活動とは？



児童

○自分が何をするのかが「分かって」or「納得して」いる。
○今すべきことをしている。

教師

○その指導に手応えを感じたり、
学習活動を通して喜びを感じたりする。
○自分の授業の質を高めていくことができる。

2 研究の内容

(1) 活動の流れ ◇繰り返して取り組む

活動の流れ	具体的な内容	補 足
○教師個人で、学習活動の“ある一部分”を取り上げる ↓ ○児童の目線に立って考える ↓ 重要 ○チームで考え、全体で共有する ↓ ○取組の様子を次の学部研究会で確認し合う	・教師一人一事例 ・児童が困っている場面 ・児童は、なぜそのような行動をするのか？ ・児童は、そのときどんな思いでいるのか？ 重要 ・教師は、どんな手立てをとればよいのか？ ・チームで意見を出し合い、具体の取組を決める ・学部で共有し、全員で同じ方法で指導、支援を行う ・教師は、児童の変化を発表し合い、「お花紙一枚分」の成果を認め合う	・取り上げる事例は、児童一人でも集団でもよい ・教師の考え方は 「児童の実態・理由・状況」 > 「教師の個人的な希望」 ・求める成果は 「お花紙一枚分」 = 「かすかなプラスの変容」 重要 ・成果 = 教師の「手応え」

(2) 年度末の振り返り

振り返りの流れ	具体的な内容
○教師へのアンケート ↓ ○アンケート結果の共有と 成果と課題の確認	(例)・児童の変容の有無、教師の手応えの有無 ・児童の目線に立った見方、それを生かした指導 など ・児童の変容については、全員がプラスの回答だった ・教師自身については、プラスの記述が多かったが、マイナスの記述（下述）もあった (例)・自分が考えた手立てではなかった。自分が頑張ったから児童がプラスに変化したわけではない。自分の成果はあったのか？ ・一つの授業が終わってから、その時間の評価を受けて次の授業につながるように内容を検討することが難しかった。 ・児童の思いを考えることが増えたが、それに対する見立てをもてないこともある。 など ・マイナスの記述について学部で共有し、児童の変容の確認や教師の考え方などについて意見を出し合った

3 まとめ

〈成果〉

- ・「児童の目線に立って」課題に向き合い取り組んだことで、プラスの変化やその兆しが見えてきた。
- ・教師が自身の指導に、喜びや手応えを感じる場面が増えてきた。

〈課題〉

- ・実践に取り組もうえで、次の考え方が大切だと学部で共有すること。
 - ◇児童の実態の見取りや課題、指導の手立てなどについて、「なぜ」そのように考えるのか、「なぜ」取り上げるのか、意味や理由を分かり合う
 - ◇実践におけるトライ＆エラーを恐れず、うまくいかなかった場合は、「なぜ」うまくいかなかったのかを考えようとする
 - ◇児童にかすかなプラスの変容が表れたとき、教師も自身の指導にプラスの評価を与えようとする
 - ◇どの指導場面においても同じように児童の目線に立って考え、実践してきたことを生かし、つなげていく

R 6 中学部研究のまとめ

I 目的

- (1)「児童生徒が分かる授業」を展開するため、どのような工夫や考え方が必要かを検討する。
- (2)「児童生徒が分かる授業」についての考え方や工夫を授業計画や授業実践に役立てるように共有する。

2 研究の内容

(1) 中学部スタンダード→共有、共通理解

1 整理整頓 置く場所が決まっていること どこにあるかひと目で分かること 自分で準備や片づけをする習慣	2 集中できる場づくり 邪魔にならない掲示の仕方 音や声の調整 友達との関係 児童生徒の特長にあった座席	3 ルール作り（帰属意識が高まる） 全員が守れるルール 提示は視覚的に、体験的に みんなで守る意識付け 確認と評価の機会を設定	4 見通しの提示 授業の全体像の提示 学習の流れの提示 今何をしているか確認できる工夫 終わりや区切り
5 分かりやすい説明 視覚的にも提示 具体的な言葉 説明を短くポイントを絞る	6 参加できる方法 できる、得意、好き 集中力に応じた活動の流れと時間配分 能力に応じた活動量に 進め方のパターン化	7 できるようになる工夫 繰り返しの効果 バリエーション スモールステップ	

(2) 整理整頓→集中できる場づくり

① 黒板をきれいに！壁面の掲示物は必要最小限に



②ロッカーを整理整頓



ロッカー使用の中学部共通ルール	
・一人2列を使用する。 ・下段→運動着、作業着 ・中段→教科書・ファイル、リュック ・上段→個人でよく使うもの等	
個人で頻繁に使用するもの	
リュック	教科書・ファイル
	運動着・作業着

(3) ルールづくり→学習態度の向上

共通の約束カードを各教室に配置し、必要に応じて提示する。→(生徒)教師の話に注目 集中して活動

正しい姿勢 背中 足 手 せなか あし て	静かにする 	手をあげて発表する 	よく きく 	声の大きさ 	ていねいなことば 	みんなと一緒
--	------------------	----------------------	------------------	------------------	---------------------	-------------------

3 まとめ

〈成果〉

- ・学習環境が整ったことで、生徒の授業中の態度の改善が図られ、自分から授業の準備をしたり、活動に集中したりする姿が増えてきた。

〈課題〉

- ・生徒が「わかった」と感じることができるよう授業づくりのポイントを検討し、共有する。
- ・生徒が自分に必要な力を身に付けるために中学部で何を学ぶかを明確にし、目標や評価を設定する。

R6 高等部研究のまとめ

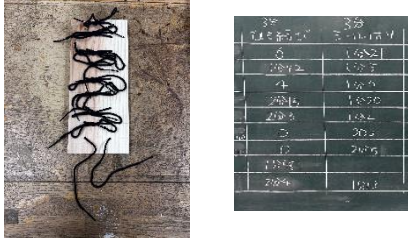
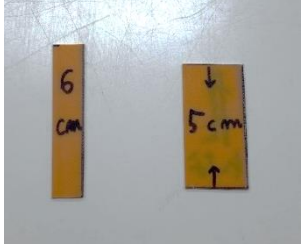
1 目的

- (1) 「児童生徒が分かる授業」を展開するため、どのような工夫や考え方が必要かを検討する。
- (2) 考え方や工夫を共有し合い、自身の取組を振り返り、授業実践に生かす。

2 研究の内容

- (1) 授業づくりシートを基にした、授業の様子の共有
- (2) 授業での課題提案、意見共有
- (3) 活動内容の改善、参考意見を取り入れた授業づくり

<グループワーク後の改善例>

① ICT機器を取り入れたい！ →授業の振り返りに Forms を取り入れる ○振り返りの内容や結果が整理しやすかった ○集計を生徒に即時で提示できた ●生徒がより興味をもつような提示や説明の仕方を考えたい	
② 指先の巧緻性を高めたい！ →作業開始時に一斉に訓練的な練習を取り入れた ○他人と比べずに、過去の自分の記録を塗り替えようと集中することができている ●練習した内容を製品づくりに取り入れたい	
③ 大きさ、重さの概念が身に付きにくい生徒 →始めは自分の体を使用して測るよう指示していたが、支援具を使用し、具体的に大きさがわかるようにした ○支援具を使うことで大きさの見当を付けやすくなり、指示された量を分けるまでの時間が短縮された	

3 まとめ

<成果>

- ・担当教科でグループを分けたことで、授業づくりのポイントをまとめたり、活動のアイデアを得たりすることができた。
- ・授業づくりをする上で、生徒が「分かった」と感じるためという着地点を意識することにつながった。

<課題>

- ・今年度は個人や小集団に対し、意欲をもって取り組むための工夫・改善が多く、限定的な取組が多かった。次年度は、活動や生活全体に関わる事項や、より大きな集団での実践をとおして、「生徒が分かる授業」の工夫や考え方を検討する。

R6 全体研究（1 年次）のまとめ

I 研究主題

児童生徒の学びの充実を実現する授業づくり

～すべての児童生徒が「分かる！」とを感じる授業を目指して～

II 研究設定理由

本校では、これまでの研究で児童生徒の学びが充実するような授業を目指し、「いわての授業づくり 3 つの視点」に基づいた授業実践に取り組んできた。また、学習指導要領を踏まえた学習評価の充実に向けて取り組み、指導と評価の一体化を目指してきた。具体的には、「授業づくりシート」の活用と「観点別学習状況の評価」に取り組み、PDCA サイクルにより授業改善を行うことで、本校の学校教育目標の達成に向け、児童生徒の目指す姿を設定し有効な手立てを工夫するようしてきた。

本校の授業づくりは、このように教師が思いや願いをもって行ってきたが、児童生徒自身が目標をもち、それを達成したことを実感しながら学ぶことが必要だと考えた。そこで、児童生徒の目線に立ち、すべての児童生徒が「分かる」と感じる授業づくりに取り組むことにした。

本研究を進めるにあたり、多様な実態の児童生徒がいる中で、全員が「分かる」と感じる授業にするためには、実践での児童生徒の姿から、授業づくりに何が必要かを明らかにすることが大切である。また、小学部から高等部までの学びをつなげることは必須であり、本校の授業づくりについて全校で共有していかなければならないと考えている。

以上のことから、本研究では、すべての児童生徒が「分かる」と感じ授業について実践し、授業改善を重ねながら、本校が目指している「児童生徒の学びの充実を実現する授業づくり」がさらに充実するように取り組んでいく。

III 研究の目標

- 1 すべての児童生徒が「分かる！」と感ずることができる授業づくりの考え方や授業づくりの工夫について明らかにする。
- 2 「分かる！」と感ずる授業づくりの考え方が定着し、授業の計画、実践、評価、改善に生かすようにする。

IV 研究の方法

- 1 全体研究会、全校授業研究会において共通理解を図る。
- 2 学部研究会において、実践する。
- 3 専門性の向上により、共通理解を深める。

V 研究の計画

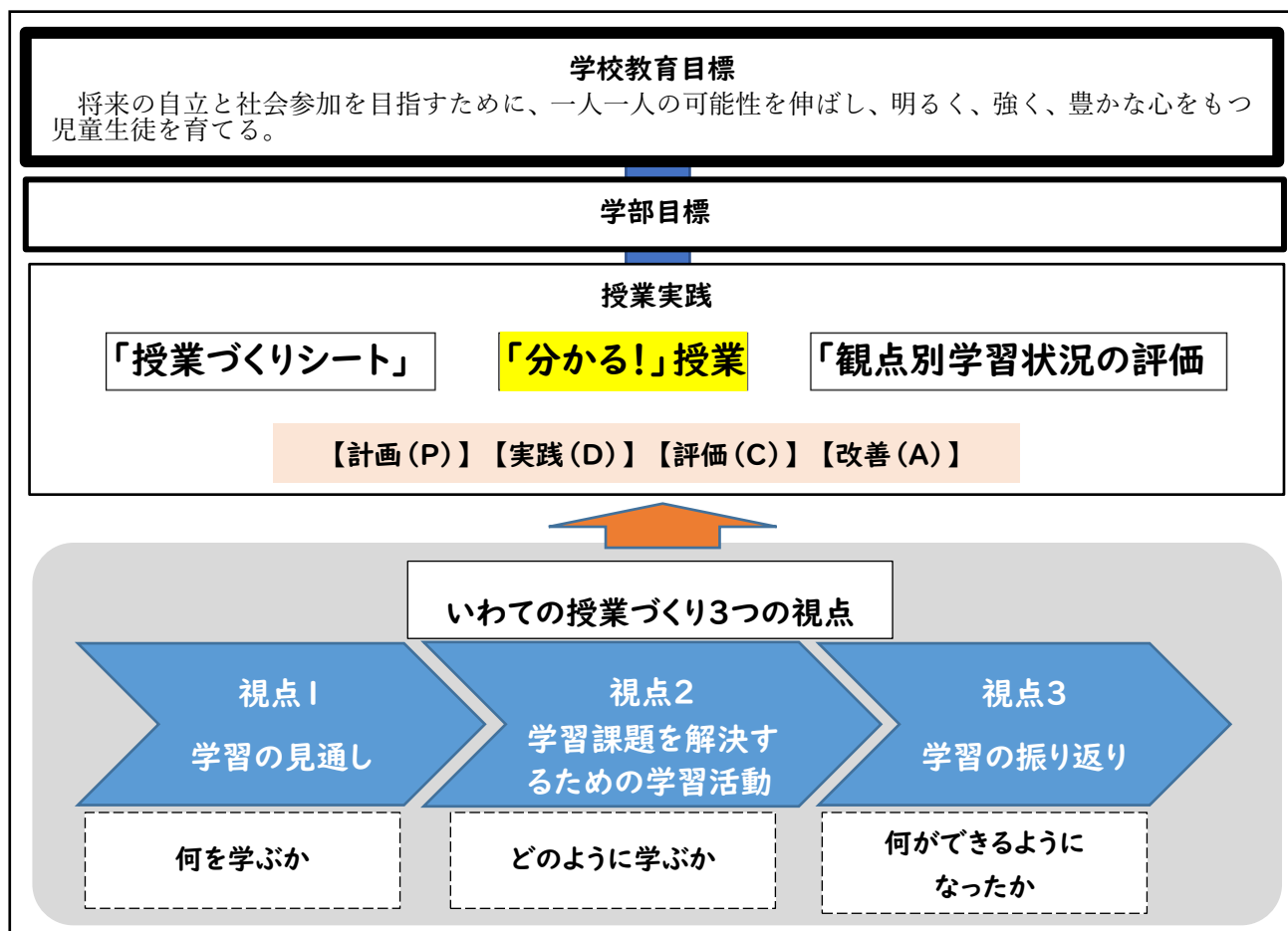
本研究は、3 年次研究とする。研究の計画は、【表 1】に示す。

【表 1】研究計画

1 年次（R6）	2 年次（R7）	3 年次（R8）
「分かる！」と感ずる授業を 実践から、探る ○各学部の課題に合わせて学部研究会を中心に実施	「分かる！」と感ずる授業を 学部で共有し、全校に発信 ○学部研究会の取り組みを継続 ○各学部研究で取り組んだことを全校で共有	「分かる」と感ずる授業を 全校で共有し、授業改善 ○全校で共有したことを基に各学部で実践 ○授業改善

Ⅵ 研究の構想

本研究の構想は【図1】のとおりである。



【図1】研究の構想

Ⅶ 研究の実践（1年次）とまとめ

- 1 学部研究について
各学部のまとめのとおり
- 2 全体研究授業について
 - (1) 全体授業研究会（小学部第4学年・国語・算数）
 - ①具体物の上下・前後などを意識させるためには、どのような工夫が必要か？
 - ②「見る力」や「注目する力」を向上させるための工夫はどうあればよいか？①、②について協議し、児童の実態に応じた具体的な支援について話し合った。
 - (2) 中学部授業研究会（第2学年・総合的な学習の時間）
「生徒全員が活動に参加するためのポイントは何か」について話し合い、生徒が授業に参加するための工夫について話し合った。
 - (3) 高等部授業研究会（Dグループ・国語）
「多様な実態の生徒に対する一斉指導のあり方」について話し合い、一斉指導の意義と個への配慮について話し合った。
- 3 1年次の研究のまとめ
 - (1) 成果
 - ・各学部の課題に合わせて学部研究を実施し、学部内で「分かる!」と感じる授業について明らかにし、授業に生かすことができた。
 - (2) 課題
 - ・全体授業研究会や各学部研究で明らかにしたことを全校で共有し、授業づくりに生かしていかなければならない。